

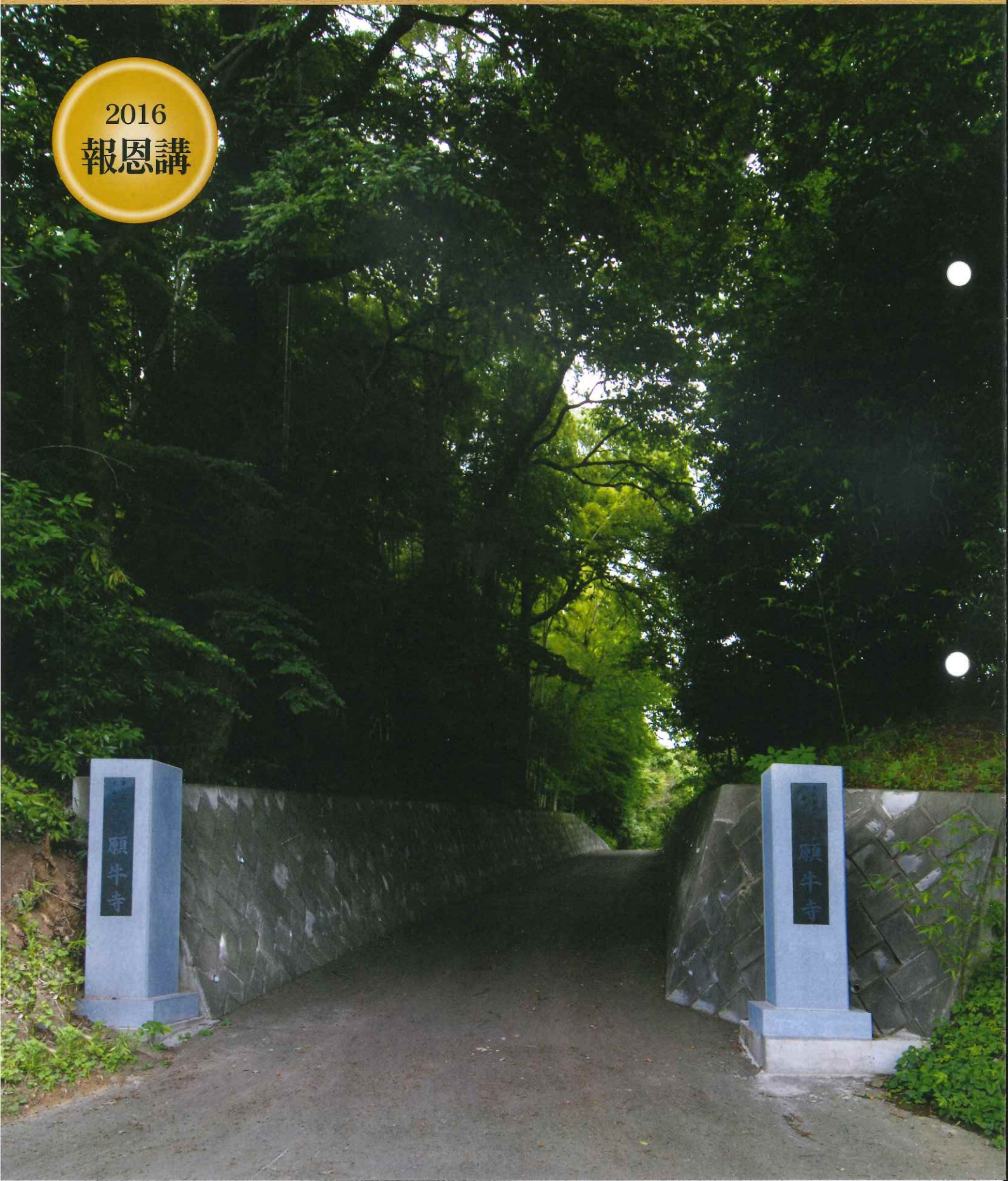
# 願牛寺報

GWANGYUJI-HOU

浄土真宗本願寺派茨城西組 大高山證誠院 願牛寺 No.4



2016  
報恩講





# お仏壇にむかい 阿弥陀仏の声を聞く

あるご門徒さんから「お仏壇は必要ですか」とお尋ねいた。たたくことがあります。そんな時、私は「ごなた様にも必要です」と答えます。ただ、必要とする理由が、皆さんがお考えのものはおそらく違いがあると思います。そこで今回は、お仏壇を必要とする理由について親鸞聖人の教えに則してお話しましょう。

まず、「お仏壇とは何か」ということですが、ご質問の方も含めて、現代におけるお仏壇のイメージは「先祖を供養するところ」というものだと思います。お仏壇を必要とする方は、供養すべき亡くなった方のある人であり、そうでない人はお仏壇はいらないということになるでしょう。

しかし、親鸞聖人の説かれた真宗の教えでは、お仏壇は先祖供養をするところとはいいません。真宗では、仏壇は「お釈迦様の智慧と慈悲を象徴する阿弥陀如来のおはします浄土をあらわしたところ」で「阿弥陀如来に私たちが向き合うところ」です。いわばお寺の小型化したものがご家庭用のお仏壇ということになります。私たちは、ご家庭でお仏壇の中心である阿弥陀如来に日々お参りすることがご門徒のたしなみとなります。

浄土真宗では、お仏壇のなかに位牌は置かないとか、先祖の写真是飾らないとか、陰膳はしないということをご存じだと思えますが、それはお仏壇は先祖を祭るところでは

ないという教えを前提としているからです。誤解のないようにいいますが、だからといって、浄土真宗でも先祖を大切にしていけないということではありません、供養の必要がないだけです。

他の宗派の場合は、亡くなった方は死後も冥界で成仏するために引き続き修行をされるという考え方です。亡くなった方の修行を応援し、早く成仏できるようにするのが生きていく私たちの務めという意味から先祖供養は必要なのですが、真宗の場合、念仏を称え信を得た（仏の教えになづけた）方は、死後直ちに成仏するので、供養の必要がないという意味の違いがあります。

また亡くなった方は、成仏された後、ただちに阿弥陀如来の徳をたたえる諸仏のおひとりになられ、私たちに仏の教えを聞きなさいと我々に伝える役割を果たされるとらえています。このため、先祖供養は必要ありませんが、お仏壇に手を合わせお念仏を称える時には、阿弥陀如来とともに諸仏方をも敬っていることになりす。この敬いの気持ちのなかにご先祖を大切に思う気持ちが含まれていることになりす。

では、真宗のご門徒は、先祖供養でないとすると、お仏壇に向かって何をするのでしようか。それには、そもそも仏教とは何かを理解していたで必要があります。

しました。私たちが生老病死に代表されるような苦しみを、まさかと思ような出来事に、長い人生において度々直面します。それほどの大変な事でもなくとも、自分の思うようにならないと怒り、悲しみ、失望し、気持ちが落ち込むことを繰り返しています。時に良いことも起き、うれしいこともありますが、残念ながら、良いことが続くわけはありません。

お釈迦様は、そのような私たちの人生のあり方をしっかりと見定め、人生は苦しみであると見抜かれ、苦しむ人々を慈悲のこころをもつて救いたい、と苦しみからの抜け出る道を具体的に教えてくださいました。

らいかもしれません、少し言いかえれば、「自分に都合のよい(自分勝手な)願いにとらわれること」が苦しみの原因です。

このようにいうと驚かれるかもしれませんが、自分の願いを実現するために、日々努力することを重ねていることは、ふだん誰もがやっている当たり前のことだからです。

自分の願いとして、例えば学業や就職、職業の選択、出世、金持ちになることや男女の恋愛・結婚、自分にとってよい環境の継続など、いろいろあります。

このような願いをもつことは、その人の人生に前向きな力と困難を克服する勇氣と安心と満足を与える効果もあります。もちろん良い面もあります。ですが、反面この気持ちに深くとらわれ、その成就することへの思い込みが募れば募るほど、果たされなかった時に深い苦しみの原因にもなるのです。ご自身にとつては幸せになるための切実で、真剣

な願いですから、仮に自分にとって都合のよい願いであってもそれが実現できないと、一気に悲嘆にくれるという思いにとらわれてしまうのです。



私たちの願いは、自分の考える幸福の実現を目指す普通の思いです。それがよもや、苦しみの原因になるとは、なかなか気づくことができません。

もし、他人の持つ願いに対してであれば、同じ願いに對してもいろいろ客観的に見られることでも、こと自分の願いにたいしては、なかなか客観的には評価できません。

もしかすると、自分は特別だというような錯覚にさえも陥り、自分勝手に気が付かないのが人間のこころの働きでもあるのです。現実に望まない結果に運悪く直面した場

合には、なかなか出口のない苦しみにのたうちまわることや起こしてしまします。

このような苦しみから抜け出すためには、冷静に苦しみの原因を追求し、自分勝手な願いであったことに気づいたなら、結果を受け入れるようにするしかありません。ところが、自分勝手な願いであるかどうかには気がつくことはとても難しいことです。

そこで、自分の常識を打ち破るお釈迦様の教えが重要となってきました。私たちはその教えに真摯に耳を傾け、自分の内面を見つめなおし、客観的に自分の苦しみを少しずつ納得していくような過程や時間が必要だと感じます。

お釈迦様の教えを聞き、そのときは「そうだな」と思っても、すぐに忘れて元に戻ってしまうのが私たちです。ですから、一日に一度でも、ご自身のこころを見つめる時間をもつことは、苦しみにあわないため、また万一苦しみに出会っても苦しみから抜け出

るために必要なことです。

ここに、私たちがお仏壇を家庭に迎え、お仏壇に向かう時間をもつ意味があります。

親鸞聖人は、お釈迦様の教えを「そうだ」とうなずけた人は「往生間違いなし」といわれました。人として生きて行く上で自分の願いを持たないことはできません。しかし、こころが自分の願いにとらわれそうになっても、お釈迦様の教えが頭の片隅にあることで、苦しんでいる自分の姿に気づき、客観的に自分を見つめなおすことができるようになります。

このように人生を生きていければ、心穏やかに過ごすことができるのです。

真宗での仏壇は、苦しみの多い人生を心穏やかに送っていくためのお釈迦様の智慧と自宅向き合うためのところなのです。今回は、みなさんに「苦しみにあわない豊かな人生を送っていたきたい」という思いからお仏壇が必要だとお話しさせていただきました。(釈弘眞)

## 編集後記

▼銀杏が色づき始めると浄土真宗のお寺では親鸞聖人のご命日である11月28日(新暦に直すと1月16日)に先立ち報恩講がお勤まりになります。

▼報恩講は、宗祖親鸞聖人のご遺徳を偲び、そのご恩に報いるようお念仏をよりいっそう味わわせて頂くということから勤められます。▼聖人は弘長2年、京都で90歳の生涯を閉じられますが、ご遺徳を

偲んで毎月28日、門信徒によるお念仏の集いが営まれ、それが大きく広まって第3世覚如上人の時、法会の基本ができました。▼この法会の集まりを「講」と呼び、聖人のご恩に報いる法会であることから報恩講と呼ばれるようになったこととです。▼報恩講では全員で『正信偈』をお勤めし、法話を聴き、お齋(会食のこと)をいただきます。お忙しい時期ですが、浄土真宗の門徒として一人でも多くご参詣いたしましょう。(高瀬)



## 親鸞聖人御絵伝二幅



〔江戸時代・願牛寺所蔵〕

御絵伝とは、親鸞聖人のご生涯の代表的場面を絵であらわしたものです。報恩講の際に本堂の余間に掛けて、聖人のご生涯をご門徒に説明する目的で本山、末寺で作成されました。

当寺にも、ご門徒より御寄進された掛け軸二幅に描かれた江戸時代の絵伝が伝わっています(上図)。場面は右側掛け軸の下から上に、次は左側下から上に向かって時間が経過するようになっており、最後に左側上の場面です。願牛寺版は、流罪を解かれた聖人が碓氷峠で関東東のご布教を決意されるところから始まり、当寺建立にまつわる場面などが描かれています。

今後数回にわたって、このなかのいくつかの場面について解説を行う予定です。